

Title	Lynn E. Roller, In search of God the Mother, the cult of anatolian cybele
Sub Title	
Author	小川, 英雄(Ogawa, Hideo)
Publisher	三田史学会
Publication year	2000
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.70, No.1 (2000. 9) ,p.111- 118
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20000900-0111">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20000900-0111</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Lynn F. Roller,

*In Search of God the Mother, the Cult of Anatolian Cybele*

University of California Press, Berkeley, Los Angeles and London, 1999, 380pp.

小川英雄

一 本書の研究史上の位置

古代オリエントには前三千年頃から文字文明が成立し、それぞれの土地において独自の女神たちが伝えられている。その主要なものだけを挙げて、イナンナ、イシュタル、アスタルテ、アタルガティス（デルケト）、イシス、アナヒタ、そしてキュベレなどがあり、このうちの幾柱かの女神については、かつて森雅子さんによって

本誌上で論じられたことがある（「西王母の原像」五六—三、一九八六）。それによれば、中国古代の女神西王母は、これ等のオリエントの地母神に類似した神性を持っていたのであるが、前一千年紀以後、とりわけヘレニズム・ローマ時代には、これ等の女神たちはギリシ

ア・ローマの女神たちと習合したばかりでなく、広く地中海世界やヨーロッパへと伝播した。こうして西方へ流布した女神の代表はイシスとキュベレであったが、ローラーの新著はその副題が示すように、アナトリア（小アジア、トルコ）の母神キュベレを主題とし、その起源から後二世紀までの信仰の発展史を扱っている。

一九世紀のヨーロッパでは、古代オリエントの文字史料の解読が進み、同時に東方の諸聖典が紹介された。この潮流はオリエントの神々のローマ帝国への伝播という研究分野を成立させた。そのような中から生れたのが、世紀末になって現われたキュモンのミトラス教研究の集大成（F. Cumont, *Textes et monuments figures relatifs aux mysteres de Mithra*, Bruxelles, 2 vols., 1896-1899）で

あった。この本の結論を独立させたミトラス教の概説 (*Les mystères de Mithra*, Bruxelles, 1899) は二〇世紀に入って版を重ね、英訳や独訳も行なわれた (日本語訳は小川英雄訳「ミトラの密儀」平凡社、一九九三)。他方、キュモンはキュベレとその若神アッティスについても早くから関心を持って研究していたようであるが、事典類への寄稿の他には、アナトリアの神々について独立した著作をすることがなかった。この分野におけるキュモンの総合的記述は、一九〇五年の講演をもとに書かれたオリエント諸宗教の概観 (*Les religions orientales dans le paganisme romain*, Paris, 1929, pp.43-68) の中に見られる。

これに対して、シャワーマン (G. Showerman, *The Great Mother of the Gods*, Madison, 1901. リプリントは Chicago, 1969) とグライヨ (H. Graillet, *Le culte de Cybèle, Mère des Dieux à Rome et dans l'Empire Romain*, Paris, 1912) が二〇世紀初頭に概説書を書いたが、この世紀の前半のアナトリア神研究としては、他にはヘプディングのもの (H. Hepding, *Attis, Seine Mythen und sein Kult*, Giessen, 1903. リプリントは Berlin, 1967) があるだけであった。

二〇世紀後半のキュベレとアッティスの研究は、ミトラス教の場合と同じように、フェルマースレンを中心に展開した。彼は「ローマ帝国オリエント宗教研究叢書」 (*Études préliminaires aux religions orientales dans l'Empire Romain*) をレイデンの Brill 書店から刊行し、その中に自らのアッティス研究 (M.J. Vermaseren, *The Legend of Attis in Greek and Roman Art*, 1966) やスファミニ・ガスパロの神学的研究 (*Stamemi Gasparo, Soteriology and Mystic Aspects in the Cult of Cybele and Attis*, 1973) の他に、全七巻に及ぶ自らの資料集 (*Corpus Cultus Cybelae Attidisque*, 1977-89) を含めたことは特筆に価する。フェルマースレンはこの資料集と時を同じくして、グライヨ以来半世紀以上もの間書かれたことのないアナトリア神の概説 (*Cybele and Attis, the Myth and Cult*, London, 1977. 日本語訳は小川英雄訳「キュベレとアッティス——その神話と祭儀」新地書房、一九八六) を著した。

フェルマースレン関係以外のキュベレの研究書としては、ラローシュ (E. Laroche, *Koubaba, déesse anatolienne et le problème des origines de Cybèle, Éléments orientaux dans la religion grecque ancienne*, Paris, 1960,

pp.113-28) とナウマン (F. Naumann, Die Ikonographie der Kybele in der phrygischen und der griechischen Kunst, *Istanbul Mitteilungen*, suppl. 28, Tübingen, 1983) が重要である。他方、上掲のキュモンによるオリエント諸宗教の概説書に相当する二〇世紀後半の著作はテュルカンのもの (R. Turcan, *Les cultes orientaux dans le monde romain*, Paris, 1989, pp.35-75) とある。

このようなキュベレの研究史に対して、本書とその著者の占める地位はどのようなものであろうか。ローラーは現在、アメリカ合衆国カリフォルニア大学デイヴィス分校の古典学教授であるが、その著作経歴から見て若手の部類に属するようである。彼女は一九八三年以後学会雑誌に執筆しているが、それは一九八五年九月九日に死去したフェルマースレンの最晩年のことであったし、当初の研究対象は実地踏査と文献史料に基いたフリュギア史であった。彼女がキュベレやアッティスについて書き始めたのは、フェルマースレンの死後三年が過ぎた一九八八年からであったと思われる。フェルマースレンの追悼論文集に招かれている (Reflections on the Mother of the Gods in Attic Tragedy, *Cybele, Attis and Related Cults*, *Essays in Memory of M. J. Vermaseren*, ed. by E. Lane, Leiden,

1996, pp.305-321) ことでも分かるように、彼女のアナトリア神研究は早くから学界から認められたようである。要するに、ローラーはポスト・フェルマースレンの世代に属する研究者であると伝えよう。そのような彼女の立場は本書の中にもはっきりと現われている。例えば、後述するように、先行する研究者たちの学説に対する懐疑的態度、フリュギア史やフリュギア考古学の重視などがそれである。

## 二 フリュギアの母神

ローラーはまず、前七世紀以後のフリュギア語碑文にマタル (Matar) と呼ばれる女神が現れること、又そのうちの二例にはクビレヤ (Kudleya) 山 (山) という形容詞がつくことを指摘し、この山の母神がそれ以後のアナトリア女神崇拜のもとになったとする。すなわち、このクビレヤが後にギリシア・ローマ世界で神々の母、大母 (マグナ・マテル) などとも呼ばれて崇拝されたキュベレの語源となったのである。キュベレの起源についてのこのような認識は、上記のフェルマースレンの概説書 (一九七七) には見られないものであり、ブリクスの研究 (C. Brixhe, *Le nom de Cybele*, *Die Sprache* 25, 1979,

pp.40-45) が出てからのことである。例えば、ローラー以前ではブルケルトがこの語源説を採用している(W. Burkert, *Ancient Mystery Cults, Massachusetts and London, 1987, p.6; p.135, n.22*)。

二〇世紀初頭からフェルマースレンまでのキュベレ論は、この母神の原始的性格を強調し、彼女の起源を先史時代の母権制社会にまでさかのぼらせたが、ローラーはそれに対してきわめて懐疑的であり、先行する諸説は理由なき先入観に捉われていると主張する。その後には、女性的なものを原始的なものと同視する一九世紀以来の民族学説や心理学説に対する反発もあるのではないかと思われる。

ローラーはまず、アナトリアの先史時代遺跡、チャタル・ヒュイクやハジュラルから出土した女性像について、その母神的性格を否定する。発掘者メラートはこれ等の偶像は母神を表わし、キュベレの先行例であるとし、フェルマースレンやブルケルトはその説に従った。ローラーはこれに対し、これ等は当時の社会内部で権威を保持していた老婦人が祖先の像、あるいは教育のために使われた模型であったとした。更に、前三―二千年紀の青銅器時代アナトリアについても母神の存在を否定する。

ヒッタイト人の宗教も同様であるが、山や泉水の神聖視や女神のアトリブートとしての猛禽などに、フリュギアの母神崇拜との共通背景が見られるという。

フリュギア人がアナトリアに姿を現わす前一千年紀については、ネオ・ヒッタイト人とウラルトゥ人の宗教を分析し、フリュギア人の母神崇拜との異同を検討する。まず、ネオ・ヒッタイト人の都市カルケミシュで特に認められたクババ(ギリシア語名キュベレ)という大女神については、上述のようなキュベレのクビレヤ起源説に基いて、キュベレとクババの関係をはっきり否定する。それとは逆に、フェルマースレンはラローシユ(上出)の説によって、キュベレとクババの同一性を全面的に認めている。ローラーは語源以外にも、図像や祭儀の面からも比較を行い、クババとフリュギア人のマタルとの接触は表面的なものであったと結論する。他方、ウラルトゥについては、その万神殿には母神は知られていなかったが、山の神の崇拜という点では共通しており、これはアナトリア的背景であるとする。

従って、ローラーにとつては、マタルはフリュギア人独自の女神であったということになる。フリュギアのマタル資料は前一千年紀初頭から前四世紀後半までにわたり、

種類としてはフリュギア語の碑文と考古出土物（圖像、聖所、奉納物）がある。前者については上述の通りであるが、つけ付えなくてはならないのは、山の母神はフリュギア人の唯一の神であったと云えるほど、他の神々についての資料が欠けている点である。後者の中心は磨崖の壁龕などに安置された丸彫や高浮彫のマタル像である。その平均的姿は正面向立像で、手に何かを持ち、長袖のドレープ付きガウンをまとい、帯をしめている。又、ヴェールをかぶり、冠をいただく。神殿は現在までのところ発見されていないので、祭儀はきざまれた段階をのぼって達する岩山の聖所で行なわれていたであろう。

ローラーによれば、これ等のモニュメントはフリュギア王国の有力者の出費でつくられ、王自身が女神の崇拜で重要な役割（例えば、聖婚の儀式）を演じた。フリュギアの山地を支配するマタルは、王国の守護女神であり、同時に、個人の家から出土する小像が示すように、平民もマタル信者であった。

この段階のマタル崇拜で注目すべきことは、ローラーによれば、いまだ固有名詞としてのキュベレは成立していなかったし、キュベレの若神アッティスもいかなかったという点である。アッティスは後世になって、ペッシヌス

の去勢された神官たちから思いつかれた新しい神である、とされる。この点は従来の説とローラーは大きく異っている。例えば、フェルマースレンはアッティス神話は歌舞音曲を併うオージー的要素と共に、バルカン半島からフリュギア人（あるいは、トラコ・フリュギア人）が持ち込んだ外来の神秘主義であるとしている。これに対して、ローラーはフリュギア人のアナトリア移住自体についてさへ触れることがなく、マタル信仰はフリュギア人がアナトリアに導入したもののか、あるいはアナトリア山地土着のものかという点にさえ言及していない。

### 三 ギリシア・ローマのキュベレ

フリュギアのマタル崇拜はどういうわけかオリエントの他の地域に広まることは少く（小川英雄「セミラミス伝説におけるアナトリア的要素」深井晋司博士追悼シルクロード美術論集、吉川弘文館、一九八七、八三—一〇〇頁参照）、逆にエーゲ海を経て、西方の世界に流布したことを示す資料が多い。それはまず、前六世紀初頭にミレトスやスミルナのようアナトリア西岸の都市に伝わり、その後次第にギリシア本土やシチリア、イタリア、南フランスでも知られるようになった。ローラーによ

れば、その間に、フリユギアでは母神マタルの形容詞であったクビレヤがキュベレという固有名詞になったが、より一般的にはメーテール・テオーン（神々の母）として碑文や文字に現われる。メーテール・オレイア（山の母）と呼ばれることもあるが、これはフリユギア語のマタル・クビレヤを受けたものである。

ギリシア人からメーテールと呼ばれたアナトリアの母神は唯一の外来神として、当初田園地帯のほこらや都市の個人宅で崇拜されたが、やがてレアやデメテルと同一視され、万神殿の一柱として受け容れられた。前五世紀初頭には、アテネのアゴラにメーテール神殿（メトロオン）が建設され、そこに公文書が納められたり、ペイディアスの弟子アゴラクリトスが母神像を作成するなど、いわば公認されることになった。

しかし、ギリシアのキュベレ崇拜にはこのような公認化とは別の面があり、それはフリユギア時代にもなかった要素をつけ加えるものであった。ローラーによれば、ティンパナムなどの楽器や舞踏をとまなうオーギー的要素がつけ加わったのはこの間のことであるし、キュベレの去勢された若神アッティスが図像や神話に現われるのは前四世紀中葉以後のギリシア世界なのである。また、

メーテールは密儀の祭神となり、入信した者たち（ミユスタイ）だけが夜間にオーギー的儀式を行ったが、このような個人宗教化も新しい現象であった。他方、前五世紀末からはメトラギュルテス（メーテールの托鉢僧）と呼ばれる正体不明の宗教家が徘徊し、警戒心やフリユギア人への蔑視を招いた。

ヘレニズム時代になると、アナトリアではフリユギア時代のマタル信仰の上に、ギリシア世界で発展したメーテール信仰が到来した。ここでは、ペルガモン王国で公私にわたってキュベレが他の神々と共に信じられたばかりでなく、ペッシヌスには去勢された神官による神殿国家が生れ、ペルガモンのアッタロス王朝と友好関係を保った。

ローラーの考えでは、キュベレの生涯を描いた神話が形成されたのは、ヘレニズム時代、とりわけ前二世紀以後のことであった。その神話は（一）捨て子伝説を含むキュベレの誕生（二）キュベレと若神アッティスの恋愛の二部からなり、この時代からキリスト教時代にかけての何人かの著述家たち（ディオドルス・シクルス、オウィディウス、パウサニアス、ユリアヌス、アルノビウス）によって伝えられている。

ヘレニズム時代キュベレ崇拝のもう一つの重要な出来事は、前二〇四年に起ったと伝えられるキュベレ神のアナトリアからローマへの劇的な遷座であった。ハンニバル戦争の末期に、ローマ人はアジアの同盟国ペルガモンの助けを借りて、国祖アエネアスの故郷からキュベレの御神体をローマに運び、大母（マグナ・マテル）と呼んだ。パラティヌス丘上のマグナ・マテル神殿は前一九一年に落成した。このように、キュベレのローマ到来は突然のことであり、しかも国家的行事であった。これはキュベレのギリシア世界への伝播とはきわめて対象的である。

ローマではマグナ・マテルは上流階級によってまつられ、国母、ユピテルの母とされた。他方、アッティスも当初より導入された証拠があるが、その崇拝は去勢された神官たち（ガロイ）の活動と共に控え目であった。前一世紀中葉以後、ハリカルナススのディオニシウス、クルクレティウス、オウイディウス、ウェルギリウス、カトゥルスなどの著述家がマグナ・マテルをとり上げた他、アウグストゥス帝やクラウディウス帝もその崇拝を支援した。これに対応して、アナトリアでも、例えばアイザノイの神殿が示すように、大母信仰はますます盛大と

なった。

## 結び

ローラーは碑文、考古資料、文献資料の注意深い取り扱いはよって、フェルマースレンまでのキュベレ・アッティス信仰史よりも、その歴史的諸段階をより明確に描くことができたと言えよう。しかしながら、本書がキュベレ・アッティスの古代史の全体をカバーしていない点は注意を要する。叙述はローマ帝政初期で終っており、ローマ帝国各属州におけるキュベレとアッティスの流布については触れていないので、この点についてはフェルマースレンを参照しなくてはならない。又、後二世紀以後流行したタウロポリウムの儀式についても (R. Duthoy, *The Taurobolium, its Evolution and Terminology*, Leiden, 1969 参照)、古代末の哲学における両神の採用についても (誤植の多い Brit-Mari Näsström, *O Mother of the Gods and Men, Some Aspects of Religious Thoughts in Emperor Julian's Discourse on the Mother of the Gods*, Lund, 1990 参照) 同様である。ローラーは後二世紀以後に関しては、後日改めて新著をあらわす予定と述べている。



なお、本書には次のような誤植がある。

p.xx *Syllose* は *Sylloge* にある。

p.3, l.26 How was she was represented ? は How was she represented ? にある。

p.67, l.9 Pessinus was a not a mountain, は Pessinus was not a mountain, にある。

p.247, l.32 *Adgistis* は *Agdistis* にある。